

子育て支援者を支える

吉 留 早木子

はじめに

筆者がこども学専攻のリズムあそびの実技の非常勤講師として就任したのが平成15年度、こども学専攻2期生から現在まで14年間、1年生前期の授業「こども学フィールドワークⅡ」の一環として「純心こども講座」を担当してきた。その間、子どもを取り巻く環境は様々に変化し、保育園待機児童問題、児童虐待、幼保一元化など、個人レベルでは到底解決し得ない大きな問題が山積である。

このような背景を抱えつつもここ鹿児島市においては空間・仲間・時間、三つの間を繋ぐ条件が整ってきたように感じる。子育て中の母親を支援する施設が次々と整えられたり（空間）、子どもとともに自由に楽しい時を過ごしたりできる、様々なプログラムが企画・実施されている（時間）。それらの施設には、たくさんの親子が集っているので子育て世代間の横つながりの関係は比較的作りやすい（仲間）。

具体的な施設としては、「りぼんかん」「なかまっち」「たにっこりん」「なかよしの」⁽¹⁾が思い浮かぶ。そして多くの幼稚園・保育園が園の業務とは別にその職員を配置して子育て支援事業を展開しており、転勤して間もない友達のいない親子も登録すればすぐに利用することができる。

現在のような環境が整うなどという事は20年前、筆者が多胎児を生み育てる頃には想像すらできなかった。初めて経験する子育てで双子ということが、精神的にも肉体的にも大きな負担となり公的機関に相談に行ったところ「多胎児のサークルが以前はあったけどね。今活動していないよだからあなたがつくりましょう」と、その通りにサークルを作

(1) いずれも鹿児島市の子育て支援施設。

り運営してみたものの、ネットも携帯も普及していない時代にあって苦心したものである。通り過ぎた今だからこそ言えることだが、その悩みや格闘して培った日々の思いは決して無駄なものではなかった。

以上のように数々の子育て支援の必要性を感じながら、14年前に本学非常勤講師として、それに並行して先に述べた子育て支援施設などでも講師として招かれる機会に恵まれた。多くの子ども、親子に実技プログラムを提供していく中で、参加者がより楽しい時間が過ごせるよう試行錯誤を繰り返し、実践をひたすら積み重ねてきた。若さで必要とされていた就任当初の頃のプログラムと、経験を経て切り口が変わってきた現在のプログラムとではアプローチの仕方は違うかもしれないが、自身で感じた子育てへの思いは常にその根底にあり、今に生きる世代の方々の子育てに対する負担感・重責感を少しでも軽減してあげられるような存在でありたいと考えている。

十数年に渡る様々な実技プログラムのノウハウが蓄積してきた事と、それらが体系化されつつある事を踏まえ、実践について振り返る機会を持つことが、子育て支援者そして、それに携わろうとしている学生のための指導のヒントになることを願って一考したいと思う。

実施状況・方針

多くの実践の場は、こども学フィールドワークⅡにおける「純心こども講座」であれ、幼稚園や保育所などでの親子リズム体操や「なかよしの」などの施設であれ、初めてその場で出会う子どもたち、親子で構成されている。1プログラムは、およそ30～60分という短い時間で展開されているため、いかに短時間で参加者の心をとらえ、楽しい気分にして、リズムにのってからだを動かすことができるのかに全神経を集中させ思考を巡らせつつ動いている。

授業の一環として展開している「純心こども講座」のように、たとえ学生であっても20人前後のスタッフが常にいることは稀である。たいていの場合、その限られた短い時間を全て一人で賄うことになる。仕事によっては人集めの呼び込みから当日の司会から全てお任せというものもあり、講師としての自身への信頼を感じるとともに、音響、監督、プロデューサー、演者、これら全てを自分一人で仕切ることこそそう容易なこ

とではなく、必然的に工夫を凝らす必要性が生まれてきた。以下に、実践の際、筆者が特に留意している事柄について述べてみたい。

(1) 基本姿勢

ア 笑顔

いつ、いかなる時でも笑顔で子どもたちとその親たちに接する。不機嫌は他人に伝染すると自身に言い聞かせ人前に出る。私生活でどのようなことがあろうともプロならばスイッチを切り替え微笑むことができる。

イ 距離感

母親と分離ができていない子には最初から近付きすぎないように徐々に距離をつめる。幼稚園・保育園児で母子分離ができていても未満児には注意を払う。

ウ 反応、視線

日常生活の時よりもオーバー気味な反応・リアクションを意識し、あなたのことを見ているよと四方に視線を配り、ポジティブな言葉かけを常に考える。反応がオーバー過ぎるとひかれることもあるのでその匙加減が大切である。

エ 動作、表現

筆者はスタジオのインストラクターとしての指導歴も長い。「参加者に動きを伝えるには参加者の10倍の動作で動きを示すつもりで」と師から学んだことを常に念頭に置いている。

オ 声のトーン

人前で大きな声を張ることは自信がないとなかなかできないことではあるが、参加者に指示が伝わらないことには場が盛り下がってしまう。声をお腹からしっかり出して伝えたいが、困難な時はしっかり声が通るようマイクを使う。

カ 意識

笑顔の項目と重なることでもあるが、これから出会いおうとする子どもや親子にどのような気持ちで向き合うのか必ず伝わる気がする。出会いは一期一会であり、二度と同じ瞬間はやってこない。もしかしたら一度だけの出会いになるかもしれないし未来に繋がるか

もしれない。そして、人生の中でほんのわずかである乳幼児期の一コマに貴重な思い出として残るかもしれない瞬間になり得るかもしれないのである。

(2) プログラム

ア 曲の選択

直観でまず好きか否かを非常に重要視している。自分の好きな曲だと元気になり気分も上がる。その上で曲の長さや速さを考える。流行りの曲は少しだけ取り入れて自分の定番を多く持つようにしている。

- ・からだ全体が動くアップテンポの曲（ドレミの歌、みんなのうたなど）
- ・じっと止まってバランスをとる曲（ガ・ガマン、アブラカタブラなど）
- ・子どもが歌いやすいような流行りの曲（ようかい体操など・数年経つとすたれる消耗曲？）
- ・立ってばかりだと飽きるので座って実施できる曲（バスにのって、カエルの合唱など）
- ・なぜか子どもが好きな曲（しのび足、ねこおとこなど）
- ・親子で、子ども同志で触れ合える曲（おすしやさん、てのひらをたいようになど）
- ・ゆったりした曲（タコクロナイズドスイミング、オルゴール曲など）

イ 機器の活用

講師活動初期は市販のCDを何枚も持参していた。数年後にはMD・CDなどに曲順・速さ長さなどを編集したものを使っていた。ここ数年前からapple社のiPhone・iPadを使用しその中にTempo Magicという有料のアプリをダウンロードして曲順をその場で変えたり、実践しているその最中に速さを変えられたりと大変重宝している。ケーブル1本で幼・保育所などの殆どの施設にあるアンプ等に接続できるので、デッキがCDを読み込まないなどのトラブルが発生しやすいCDよりもはるかに使い勝手が良く信頼性も高い。

(3) 環境

ア 場所

これまでほとんど屋内で実施しているが、時折親子遠足などで公園、広場などで行うこともある。屋外で行う際には天候、日差しなど考慮すべき点が多くなる。

イ 危険箇所

壁、足元、子どもがつかずいたり、ぶつかったりするもの、積み重なった椅子など崩れてくるもの、濡れて滑るところなどはないかなどくまなく見渡す。

ウ 視界

絵本・おもちゃなど子どもが興味を示すものが周りにないか、もし片付けるスペースや時間がない時は、その上を大きなバスタオルや布で覆う。

エ 床の状態

子どもの足の裏の感覚を刺激したいので、室内だと裸足で行うことが多い。フローリングなのか畳なのか、フローリングならささくれと埃をチェックする。畳ならクズまみれにならないよう、そして畳の目を利用して滑りやすい方向を考慮する。

オ 音響

これはリズムあそびの要である。プログラムの項目に挙げた機器類を最大に活用するためにも、そのチェックを怠ると台無しになることがある。マイクもそうである。参加者に適正な音と指示の音が伝わるよう必ず事前に音を出し自分の耳で確認する必要がある。最近ほぼマイクはワイヤレスであるが、ケーブルがついていることも稀にある。そしてそれはハンドタイプなのかピンタイプなのかヘッドセットタイプなのかも考慮する。各々いずれのタイプでも対応できるとよい。万が一の為に私は常に車の中に自前のアンプ、マイク、Bluetooth 対応のスピーカー、iPhone を接続するケーブルを準備している。

(4) 子ども

ア 表情

楽しそう、ニコニコ、緊張していそう、怖がっていそう、無反応、

泣きそう、じっと見つめる、目を見ないなど、子どもたちの表情は様々である。号泣する子どもは少し落ち着くまで親もしくは保育者に任せる。時間が経つにつれて親も子ども気持ちがあほぐれていくものである。過剰に反応し過ぎない。ある保育園で感染のリスク回避からか、園児も保育者も全員がマスクをしていたことがあり、表情を全く伺えずに面食らった経験がある。表情を読み取れるかどうかは、その実践の出来を左右するほど大きなものであると感じている。

イ 動き

著しくプログラムを妨害したり、ほかの子どもの活動に影響を与えたりしそうな激しい動きの子どもがいないか観察する。子どもの状態に合わせて必要な場合には、親もしくは保育者に日常の様子を伺った上でフォローしてもらいながら、立ち位置や隊形に留意し、プログラムもその子どもができるだけ落ち着けるよう配慮する。動かず模倣せずじっと観察している子どもがいる場合には、特に無理強いせずその場にいるだけで参加していると認識したい。親、保育者が後ろに回り無理に手を動かさなくとも、子どもが自発的に動き始める瞬間を見るのは感激である。

(5) 母親

ア 服装など

スカートでは動きが制限されるのでスカートの親がいたらプログラムを配慮する。子育て中に爪が伸びている親は稀だが、以前親子プログラムの時に親の足の爪で子どもの足を負傷させたことがあった。以来親へは裸足の強要はしていない。

イ 表情

子どもと関わる際の表情が笑顔であるか、目を見て向き合っているか、子どもに積極的に関わろうとしているか、疲れて憔悴していないか、気になる親子は気付いたことを保育者に伝え、いつもの様子を聞き出したり、相談したりする。

まとめ

最後に、これから子育て支援活動を担っていく方たちに引き継いでい

子育て支援者を支える

きたいことをまとめておきたい。筆者がこれまで実技の外部指導者として数多くの保育園、幼稚園、子育て支援施設に招かれる機会に出会った保育者の方々から学ぶことは非常に多かった。その方々の熱い思いを胸にこどもたちと向き合い、楽しい時間をともに作り上げることはとても幸福で意義のあることだと感じている。しかしながら筆者が子どもたちと過ごせる時間はわずかな時間である。筆者のような園外の講師に、活動の提供を依頼することを否定するつもりもないし、子どもたちが「プロの指導者」に指導を受けることに意味はもちろんあるが、外部の指導者がいる時にしかその活動が成り立たなかったり、園でそうした活動に取り組めなかったりするのでは意味がない。毎日の園での生活の中に活動が自然と組み込まれていくことを願って止まない。保育者の方々にはこうした活動に対して、あまり構えないでいただきたいと思う。常日頃子どもたちと接している保育者の方々が、研修などで学んだことを生かす際には、是非ワクワク楽しい気持ちでプログラムを実践して頂きたいのである。全てを真似するつもりでとまではいかなくも、一曲でも思い出して子どもたちと楽しんで欲しい。講師の真似をしようとすると、再現することに意識が向かってしまい、振り付けがわからなくなった時などに、流れがとまってしまう。それよりも、自分の好きな振り付けにアレンジしたり、時には思うがままに動いたり、子どもに任せてみたりするなど、「それもいいね！」と状況を受け入れ、利用していく柔軟さを大切にしていきたい。

幼稚園や保育園の先生方の仕事は、子どもたちを成長させるという使命感を抜きにして語ることは難しいが、リズムあそびや、表現の領域においては、思うがままに気持ちも心も解放させた方が、面白みがある。この面白みを楽しめる感性を持ち続けていただきたい。

(鹿児島純心女子短期大学非常勤講師)

